

# シンポジウム開催にあたって

寺 田 勇 文\*

(鹿児島大学南方海域研究センター)

はじめに

本日のシンポジウムの総合テーマは、「フィリピンの宗教と社会」であります。今回のシンポジウムは、南方海域研究センターが主催する第12回目のシンポジウムにあたります。こうしたシンポジウムは、南海研センターの研究小委員会の企画によって、1年に2回程度、各研究分野の専門家を学外からお招きして研究報告をしていただき、その後に総合討論を行なうという形式で続けてまいりました。

シンポジウム開催にさきだちまして、東京・大阪・福岡からそれぞれお越しいただきました講師の先生方、司会役をお引受けいただいた本学の早瀬先生にお礼申し上げます。また、学長の井形先生、農学部 of 林先生をはじめとする研究小委員会の先生方、井上晃男センター長および南海研センターのスタッフの方々に深く感謝いたします。

さて、本日のシンポジウムのテーマは、「フィリピンの宗教と社会」です。ここ数年フィリピンでは、アキノ元上院議員の暗殺、大統領選挙、マルコス政権の崩壊、ピープル・パワーの登場、「二月革命」、コラソン＝アキノ政権の誕生、さらにはクーデター、フィリピン各地での新人民軍の活動といったように一連の政治的な出来事が次から次へと起こっております。また、日本との関係においては、買春観光問題、若王子氏誘拐事件、じゃばゆきさん、さらにはフィリピンからやってきた花嫁さんなど日本国内でのフィリピンの人達の動きもあって、私たちはフィリピンという国、あるいはフィリピンの社会というものに目を向けさせられています。

ところが飛行機でわずか3～4時間という近い距離にある、いわば日本の南隣の国であるにもかかわらず、フィリピンの社会と文化についてはよく知られておりません。フィリピンの宗教についても同様で、最近の日本のテレビ番組や報道のおかげで、フィリピン人の多くがカトリック教徒であるということぐらいはどうか私たちの常識となってきたようですが、それにはどういう歴史的な背景があるのか、フィリピンのカトリックの人達がどのような宗教生活をおくっているのかということになると、私たちの知識、体験は非常に限られております。ましてや本日の報告にもありますようなフィリピンのモスレム、つまりイスラム教徒の社会ということになりますと、その存在さえなかなか理解されていない、といっても過言ではありません。

こういった最近の私たちをとりまく状況、つまりフィリピンの政治不安、経済危機に関する情報だけが伝わってくるというような状況にあって、このシンポジウムでは、フィリピンの宗教をテーマとしながら、そうした表層的な情報の向こう側にあるもの、つまりフィリピン人の精神構造、世界観、そしてフィリピン社会内部における宗教問題を議論してみようと考えたわけです。

---

\*現在、上智大学アジア文化研究所

### 三つの宗教文化圏

フィリピンには大きく分けて三つの宗教文化圏が存在します。16世紀中ごろの1565年からフィリピン諸島はスペインの東洋植民地となりました。そして植民地化の過程でカトリシズムが布教されてきた結果として、大多数の人がカトリックとなったキリスト教(カトリック)文化圏、ルソン島の北部の山岳地帯やミンドロ島、パナイ島などの高地のいわゆる山地少数民族が居住している地域を中心とする伝統的な精霊信仰文化圏、そして南部のミンダナオ島やスルー諸島に分布するイスラム文化圏の三つです。もちろんスペイン植民地体制下でカトリック文化圏となった地域には、現在ではプロテスタントもかなり含まれてきておりますし、少数民族の伝統的な宗教生活も、その周辺の平地民との接触によって徐々に変わってきてつづつあります。また、南部に多いモスレムの人達の社会も、ミンダナオ島での政情不安や経済問題、国内移民現象などによって変容しつつあります。

しかし、フィリピンの宗教と社会とを問題にする際には、一応の区分としてこの三つの宗教文化圏の存在、あるいはその歴史的な背景を念頭におくことが大事であると思われます。フィリピン国民の宗教別人口構成は資料1の通りです。国民のおよそ85%がカトリック教会の信徒、そして4.3%がモスレムです。

〔資料1〕 フィリピン国民の宗教別人口構成（1970年）

宗教／教派	人数	比率
ローマ・カトリック教会	31,169,488人	85.0%
アグリパイ派	1,434,688	3.9
プロテスタント諸教会	1,122,999	3.1
イグレスシア・ニ・クリスト	475,407	1.3
イスラム	1,584,963	4.3
その他	896,941	2.4
総人口	36,684,486	100.0

### プログラムについて

さて、本日は、四つの研究報告がなされることになっております。最初の報告1は、「フィリピン＝カトリック社会の歴史的形成をめぐって」というタイトルで、フィリピン史をご専攻の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の池端雪浦先生にお話しいただきます。池端先生は、つい最近フィリピン革命とカトリシズムに関するご研究をまとめられましたが、今日は歴史学の立場から、フィリピンにおけるカトリック社会の歴史的展開、さらにはフィリピン人のキリスト理解の問題についてご報告いただく予定です。

報告2は、「聖地バナハオ巡礼をめぐって」というタイトルで、近年フィリピンで一般の注目をあびるようになった、フィリピンの南タガログ地方のバナハオ山における民衆の巡礼活動について、文化人類学の観点からその概要を報告するものです。

報告3は、「＜二月革命＞の基層：カトリシズムの視点から」というタイトルで、1983年8月のマニラ空港におけるベニグノ＝アキノ元上院議員の暗殺から1986年2月のコラソン＝アキノ政権樹立までの政治過程に、カトリシズムあるいはそれを基盤としたフィリピン人の変化にたいする理解の枠組がどのように作用したかという問題を、九州大学教養部の清水展先

生に報告していただきます。清水先生は文化人類学者として、長くルソン島中央部の少数民族ネグリート族の調査に従事されておられましたが、今回のシンポジウムでは最近の現地調査をもとに、上のような優れて現代的なテーマについてお話しいただく機会を得ることができました。

報告4は、国立民族学博物館第2研究部の宮本勝先生による「マニラ首都圏のイスラム教徒」に関するものであります。宮本先生は、これまでミンドロ島のマンヤン族に関する社会人類学的な研究を進めてこられましたが、ここ数年はフィリピンのモスレム社会、とくにマニラ首都圏に移住してきたモスレムの人達についても現地調査をなさっておられます。

さて、本日のシンポジウムの司会さらに総合討論の座長は、本学教養部東洋史研究室の早瀬晋三先生をお願いいたしました。早瀬先生は、フィリピンのとくにミンダナオ島ダバオの少数民族の社会変容や、フィリピンにおける日本人移民についての研究をなさっております。当初はこのシンポジウムで研究報告をお願いする予定でしたが、土曜日の午後数時間という時間的な制約があるために実現できず、総合討論のまとめ役をお願いしたような次第です。総合討論の時間には、フロアの皆様からコメントやご質問をいただいて、さらに議論を発展させたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

このシンポジウムを契機として、フィリピンの宗教と社会に対する理解が深まり、また研究者の間でも相互の交流が一層深まるのであれば、主催者である南方海域研究センターとしては大変嬉しく思います。